

第25章 近代植民理論

【P418～P419,後6行目】

まず、ここで言う植民地とは、自由人が移住して開拓された地域（国）とアメリカのように旧来の栽培植民地であったが、奴隷制廃止で移民が開拓する地域も含まれる。（アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド等）

資本主義経済学は、生産者自身の労働による所有と、他人の労働搾取による所有を混同している。前者のもとに後者が成長することを故意に忘れていて。

経済学発祥の地、西ヨーロッパでは、本源的蓄積・労働者の収奪は、ほぼ完結しており、資本主義的支配は、国民の生産活動を支配しているか、発展が遅れているところでも間接的に支配している。

この出来上がった資本の世界で経済学者は、事実が彼の理論と合わなくなればなるほど、躍起になり以前の法や所有の観念を飾り立てた言葉で覆い隠す。

植民地で資本主義的支配は、自己労働の所有と、資本家でなく自身の労働で富ます生産者として衝突（妨害）する。

西欧の資本家は、国の権力で妨害を暴力的に排除し、経済学者も追随して守ってくれる利害関係があるが、植民地の所有者は、この地では西欧のようなことが出来ないことを知り、衝突回避のため、労働の社会的生産力の発展等が、労働者の搾取とそれに応じた生産手段の資本への転化なしではできないことも知る。国富のため国民の貧窮をもたらす人為的手段を探求するが、その弁護論的甲冑は剥がれ落ちていく。

【P419,後5行目～P421,3行目】

ウェイクフィールドの功績は、植民地において、母国の資本主義的諸関係に関する事実を発見したことである。当初の保護貿易制度が母国における資本家の製造に努めたように、彼の植民理論は、植民地における賃金労働者の製造に努めるとし、これを「組織的植民」と名付けた。

ウェイクフィールドが植民地においてまず気づいたことは、貨幣、生活手段、機械、その他の生産手段を所有しているからといって、すぐに資本家になるのではなく、そのためには賃金労働者・自分自身を自由意思で売らざるをえない人間が必要である事と、資本は物ではなく、物によって媒介された人と人とのあいだの社会的関係であることを発見した。

用意周到に準備し植民地に向かったピート君の失敗は、西欧の諸本主義的支配を用意できなかったこと。（当然植民地では無理なこと。）

【P421,4行目～P423,後8行目】

ウェイクフィールドの発見の理解のための2つの予備的考察が必要である。

- ① 生産手段と生活手段は、直接生産者の所有物としては資本ではない。資本になるのは、同時にそれを労働者の搾取と支配の手段として使える諸条件のもとにおいてのみである。しかし、経済学者の頭の中では、いかなる事情のもとでも、そのもの個々を資本と呼び、ウェイクフィールドも同じ考えである。
- ② 互いに独立している多数の自営労働者の個別的所有物の生産手段の分散を資本の均分といっている。さらに、もし社会の全成員に資本が均等分配されたら、自分で使用できる以上の資本蓄積はしないであろう。アメリカがそうであり、土地所有への情熱が労働者階級の存在を妨げている。労働者が自分自身のために蓄積する限りは、資本主義的蓄積も資本主義的生産様式も成り立たない。それが可能となる賃金労働者階級が欠けているからだ。

旧ヨーロッパでは、いかにして労働者の労働諸条件の収奪が可能だったか。それは、独特な社会契約によってである。その社会契約とは、昔からある自由意思による意見交換、相互理解により、資本の所有者と労働の所有者に分割されたものであると言っている。

一言で言えば、資本蓄積のために、大量の人が自身を収奪したのだ。であれば、社会契約を夢から現実にする人間と環境がある植民地では、自己犠牲が自由勝手に働くに違いない。だったら組織的植民は何のために必要か。それは、アメリカ北部の諸州では、人口の10分の1が賃金労働者で、イギリスでは人民の大部分が賃金労働者である。植民地では、労働人類の自信を収奪する本能など存在しない。ウェイクフィールドさえも、奴隷制度が、植民地の富の唯一の自然発生的な基礎なのである。サント・ドミンゴへの移民者は、(奴隷制があったので)本国からの労働者を必要としなかった。奴隷制がなければ、資本の破滅、縮小しただろう。イギリス人によって建設された最後の植民地(アメリカ?)では、(奴隷制はなく)資本の破滅、移住者の自己労働以外の資本はなし状態となった。

【P423,後7行目～P425,2行目】

資本主義的生産の基礎は、民衆からの土地の収奪である。

これに反して、植民地は広大な共有地の一部分を自分の私有地、個人生産手段にすることが出来、後から来た移住者も同様にできる。これが植民地の繁栄であり、資本創設の抵抗でもある。土地が廉価のため、事業拡大のために他人から土地を収奪せず買えば良い。個人事業主だらけで労働者が発生しない。高い労賃払っても労働者のなり手がいない。

植民地では、労働条件、その根源の土地からの労働者の分離がほぼないため、工業からの農業の分離も存在してない。そんなところで、資本のための国内市場はどう生じるのか。アメリカ人は土地を所有しているからと農業だけに専念するのでなく、家具や服等なんでも自分で作る変人である。これじゃあ資本家は発

生しない。

【P425,3 行目～P428,4 行目】

資本主義的生産の美点は、賃金労働者を賃金労働者として絶えず再生産する事と、資本蓄積に比例して絶えず賃金労働者の相対的過剰人口を生み出すことである。労働の需要供給が保たれ、最後に資本家に対する労働者の絶対的依存関係となり、母国の経済学者が、買い手と売り手の同等で自由な契約関係と吹聴する。

しかし、植民地では多くの労働者人口が流入するが、労働市場は絶えず供給不足であり、労働の需要供給法則は破られる。一方では旧世界（西欧）が、労働者を移民させるが、植民地では、賃金労働者を賃金労働者として規則的に再生産しようとしても思うようにならない。今日の移民労働者は、明日は資本のためでなく自分のために独立し、個人経営者となるから。ウェイクフィールドが嘆く。労働力の流入は、恒常的でも規則的でもなく、小さすぎるし不安定である。労働者と資本家のあいだで分けられる生産物は大きい、労働者がとる分が大きいので、労働者はすぐに資本家（個人事業主）になってしまう。資本家は、長生きしてもわずかな蓄積しかできない。資本家が蓄積を増やそうと自分で賃金労働者を西欧から輸入しても、それらの労働者もまた、個人事業主となり離れていく。資本家は、自分の金を使って、競争相手を輸入したのだ。賃金労働者の資本家への依存関係が欠乏している。弟子のメリウ“ェールは、植民地では労賃が高いため、より安く従順な労働を渴望する。古くからの文明国では、労働者は自由であるとはいえ、資本家に自然法則的に依存しているが、植民地では、この依存を人為的手段で作り出さなければならない。

【P428,5 行目～P430,後 6 行目】

ウェイクフィールドによれば、この弊害は、生産者と国民財産との野蛮な分散制度である。生産手段が、無数の自営所有者に分散されるとともに、資本の集中が破壊され、結合労働の資本主義的基礎を破壊する。よって、長期的事業を行うのは難しい。しかしヨーロッパでは、労働者階級が資本の付属物であり、常に過剰に存在しているから、長期的事業を進められる。彼は、移住がしばしば停滞し、過剰な労働者が滞留しているカナダやニューヨークの資本家の話として、「長期的事業計画はあったが、すぐ辞めて個人事業主になることが分かっている労働者を雇えるか？この移住者の労働の確保を確実にできるなら、高価な労賃でも雇った。例え彼らが辞めても、新たな労働者の供給が保証されていれば、それでも雇っただろう。（そんな保証がないからできなかった。）」

イギリスの資本主義的農業とアメリカの分散的農業経営と比較した後で、「メダルの裏」（表裏関係、表の顔裏の顔、ここでは皮肉か？）までみせた。アメリカ

カ民衆は、裕福で比較的教養があるが、イギリスは、農業労働者より農耕馬が上であると。しかし心配不要だ。国富は、国民の貧窮と同じ表裏である。

植民地の反資本主義的な癌腫をどう剥がすか？

すべての土地を国民的所有から私有に転化すれば悪弊の根絶になるが、植民地も破滅する。政府が、この処女地を需要と供給に無縁な人為的に高価（移民が長期に働かなければ買えないくらいの高値）にする。高価で売ったものを基金として、それを新たにヨーロッパから移民を受ける資金とし、賃金労働市場を満たしておこう。こうした状況にすれば、植民地では最良最善となる。これが「組織的植民」だ。ウェイクフィールドは勝ち誇って叫ぶ、（以下 P430,8 行目～P4313 行目までで説明しています。）

【P430,後 5 行目～最後】

このウェイクフィールドの植民地用に推奨した「本源的蓄積」の方法を長年イギリス政府が実行してきたことは特徴的であるが、失敗した。（「ピールの銀行条例」一第 3 巻第 34 章に出てきます。イギリスの当時の首相の名前から呼ぶ）

移民の流れがイギリスの諸植民地からアメリカに代えられたにすぎず、資本主義生産の進歩と政府の圧迫の増大で、植民地用「本源的蓄積」は不要となった。一方でアメリカへの膨大な量の移民流入が、東部へ集中し労働市場に滞留した。他方、アメリカ南北戦争は、国に膨大な借金を作らせ、税の引き上げが行われた。さらに、金融貴族を生み、山師会社への巨大公有地の寄贈等により急激な資本の集中を生じさせた。こうしてアメリカは、移住労働者の天国でなくなった。資本主義的生産が発展し始めた。ウェイクフィールドが批判した、イギリス政府が行った植民地、未耕地の貴族、資本家への贈与は、特にオーストラリアでは、金鉱の発見に伴って、大量の移民が集まり労働市場の加重となり、売春がはびこった。この章では植民地の状態を論ずるのでなく、旧世界の経済学が新世界において発見し公言している秘密である。それは、資本主義的生産と蓄積の様式が、また、資本主義的私有は自己の労働による私的所有を破壊、つまり、労働者の財産収奪を条件としている。